

沢村貞子著「沢村貞子 貝のうた」日本図書センター 1999年12月25日刊を読む

## 家庭教師・女子大時代

1. 女子大学生の生活がはじまった。相変わらず六区を横切り、田原町から市電に乗り、上野池の端で乗りかえて護国寺まで行った。そこから目白の女子大まで、歩いて 10 分ほどの道のりだった。
2. 学生たちは、ほとんど中流以上の豊かな家庭の娘たちだった。赤、えび茶、紫、紺と色とりどりの袴を裾長にはき、白足袋にフェルト草履、長い袂をひらひらと風にそよがせて三々五々、ひろい校内をゆったりと歩いていた。いいあわせたように、黒い髪を衿元にたばね、白衿を細くのぞかせている。洋装が一割たらずだったのは、地方の人が多かったせいで、そのほとんどは学校の寮にはいって、寮母から監督しつけをされる寮生活だった。私のように家から通うものは、お通学生とよばれ、その数はすくなくかった。
3. そのころの地方の女学校は四年制だったけれど、女子大では、東京の五年制女学校を出たものも、一様におなじクラスに編入した。地方のお嬢さんたちはおっとりとも静かなのに、お通学生は、気が短くてにぎやかな人が多かった。ことに、早口の私は、入学早々担任の上品な老女先生から、「下町のお方は少々おことばが荒いようですから、お気をつけ遊ばして……」と、言いにくそうに注意された。この先生のほかにもう一人、優秀な成績で卒業したばかりの若い先生が、私たちのクラスの担当責任者だった。
4. 1 週 18 時間から 22 時間の範囲で、必修科目以外に自由選択科目をとることができる。私は時間いっぱい、国文科の講義を希望した。もともとは国文科へはいりたかったのだが、女学校の先生の資格のとれるのは、この師範家政学部だけだった。
5. 間もなく私は、〈女の大学というのは、この程度しか学べないのだろうか〉という疑問を感じた。東京の、五年制の女学校を出た人たちは、みんななんとなくもの足りないらしく、顔をあわせるとブツブツ言っていた。
6. 当時の女子大は、地方の資産家のお嬢さんたちが、花嫁資格をさらに高めるために 1、2 年だけ在学する風潮があった。学校側も、その点を気にして、私のはいった翌年、あたらしく高等学部が設けられた。本気で学びたい女性はそこにはいり、3 年を経てさらに大学部 3 年を修了し、はじめて男子同様、「学士」の資格を得ることができるというような制度だった。しかし、文部省の許可がなかなか得られなかった。

7. 「女をまったく男とおなじように勉強させるのは、女子教育の行きすぎである」  
当時の文部省の人たちのほとんどが、そういう意見だったという。
8. 師範家政学部のほかに、家政学部、国文学部、英文学部、社会学部があった。社会学部は新設されて日が浅かった。
9. 「社会学部は、社会の実態を研究するところで、社会主義を研究するところではない」  
学校当局は、世間の風潮に押されて、この学部を新設したときから、再三、生徒に注意したそうである。それなのに、社会の実態を研究してゆくと、どうしてもその仕組みの不合理的に怒りをおぼえ、ついには社会主義運動に走る生徒が次から次へとあとをたたなかつた。私が入学して間もなく、とうとうその一人が検挙され、学校じゅうが大きなさわぎになった。その生徒の寮の私物のなかから、好ましくない傾向の本が何冊か発見され、校長は、
10. 「……この不祥事は、ひとえに私の監督不行きとどきであります」  
と、校庭に生徒たちを集めて涙を流して反省した。
11. しかし、校長先生の真心も、時代の流れはとめられず、その後も何人かの女子大生が校長室へよばれては、家庭の都合による中途退学として、学校から姿を消していった。
12. いよいよ普選が実施された昭和 3 年には、「三・一五事件」で多数の共産党員が投獄され、治安維持法は改められて、死刑、無期の極刑が追加された。世の中の波は日増しに荒立ち、静かで品のいい目白の丘にも、そのしぶきはふりかかってくる。
13. それでも私は、その動きから目をそむけていた。知りたくなかつた。私はひっそりと、おだやかに生きてかかった。もちろん、名誉にもお金にも、なんの興味もなかつた。ただ、人間らしく、誠実に生きてゆきたかつた。
14. <私の生きる道は文学だわ、政治運動には向かないもの——>
15. その私にとって、昭和 2 年の芥川龍之介氏の自殺はショックだった。そのころから哲学書をあさるようになった。
16. <私とはなんだろうか。人間は、なんのために生きるのだろうか>
17. こどものころから心の隅で感じていた疑問が、いつそう強くなってきた。ニーチェやキルケゴールまでかじってみても、生半可な文学少女に何ひとつわかるはずもない。キリスト教会へかよってみたり、西田<sup>てんこう</sup>天香氏に心酔して一燈園へはいろいろとしたのも、このころだった。

18. 私は、女子大へ行ってよかったと、いまもおもっている。たんに知識を得るだけなら、そのころの、あの程度のものを学ぶだけなら独学でもできたかもしれない。〈学生生活は 1 年の勉強ですむものを 4 年に引きのばしている〉などと、生意気に溜息をはいたこともある。でも、それはまちがっていたと思う。運よく学生生活をおくることができたからこそ、私は、私の青春を充分なやむことができたのである。

19. 社会の流れにとびこむ前に、学校という囲いのなかで、ゆっくり考えることができたのは、しあわせだった。たとえ、それからの道が、どんなに曲がりくねって、失敗を重ねつづけたとしても…  
…。

P75 ~ 79

<コメント>

女優 沢村貞子さんの日本女子大学時代の真摯な生活がよくわかる文章。なぜ治安維持法の改正とともに普通選挙法が制定されたのかを考えると、選挙権年齢が 18 歳以上になった意味を考える参考になる。

— 2016 年 7 月 25 日(月) 林 明夫記 —